教育支援人材認証協会事務局だより
平成 28 年度文部科学省委託事業
青少年の体験活動の評価・顕彰制度に関する調査研究　表彰式の開催

平成 29 年 3 月 13 日　会場　文部科学省　旧文部省庁舎 6 階講堂

青少年体験活動奨励制度ジュニア版として小学生 4・5・6 年／中学生の活動参加者を募り、全国で 300 名を超える達成者が誕生し、62 名の達成者（小学生 23 名、中学生 15 名、高校生 10 名、大学生 14 名）、保護者、引率者、アドバイザーの方等多くの参加を得て、表彰式を行いました。

小・中・高・大の代表者 1 名ずつが、それぞれの活動を発表。小学生の発表では、ボランティア活動として行った、スマイルアフリカプロジェクトで、アフリカの国に送る靴を集める作業の様子等説明をしてくれました。学習体験活動として行ってきたバイオリンの演奏も披露。中学生の発表では、身近なところから始めたゴミ拾いの活動を、体験活動奨励制度の活動記録 BOOK の記載が終わった今でも、友だちと一緒に今も続けている様子が報告されました。高校生の発表では、自然体験として林業に関わる活動を為し、最後は大木を切り倒すことまで体験。活動を通して、様々な立場の人と交流をし、コミュニケーションの大切さを学んだことが報告されました。　大学生の発表では、川の水源地を探索する自然体験活動とクリスマスイベントにおけるボランティア体験活動が報告され、社会に出る手前にいる大学生らしく、これらの体験活動を自分のキャリアと結びつけて、その内容を捉えている様子がうかがえたのは印象的でした。

制度の内容を解りやすく示すため、リーフレットも今年度作成しました。



▲表彰式　神山文部科学省大臣官房審議官から修了証が代表者に授与されました



▼修了者の活動紹介　小学生、中学生、高校生、大学生を代表して、1名ずつ発表



▼リーフレット



加盟団体は現在、22 団体（20 大学＋1 専門学校＋1 団体）！　詳しくは、JACTES ホームページをご覧下さい

一般社団法人
教育支援人材認証協会
Japan Association for Certifying and Training Educational Specialists

発行：一般社団法人 教育支援人材認証協会 事務局
東京都小金井市貫井北町 4-1-1 東京学芸大学内
お問い合わせ：TEL:042-329-7605　Mail:info@jactes.or.jp
http://www.jactes.or.jp

あそびのタネ通信 ③

教育支援人材認証協会発信。会員と会員を“つなぐ”ニュースレター



【あそびん】

認証者の皆さまへ
【こども支援士講座】開催のご報告です！
特集「こども支援士(アフタースクール)」認証講座 開催

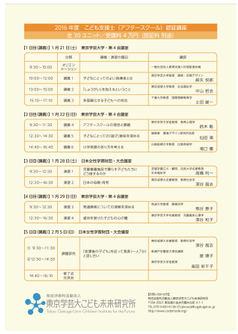
「あそびのタネ通信」 3 号　発行日 2017.03.31

特集　「こども支援士 (アフタースクール)」認証講座 開催

平成 29 年 1 月 21 日～ 2 月 5 日　5 日間　全 30 時間
主催：NPO 法人東京学芸大こども未来研究所
共催：公益財団法人日本女性学習財団

14 名の受講生が、最新の教育課題トピックス；発達障害、多国籍化、子どもの貧困、母親の役割の変遷、子どものあそびの環境等について、第一人者からの 6 講義、4 演習、課題研究と 5 日間にわたる講座に真摯に取組まれました。補講受講者も含め計 15 名のこども支援士が新たに誕生します。民間学童の指導者、音楽教室の主宰者、放課後子ども教室指導員、子育て広場の運営者、特別支援教育デイサービスの指導員、ベビーマッサージ教室運営者等、現場で活躍される多彩な実践者が臨まれました。実践にあたり、学びの場の確保が難しく基礎を学びたい、今後の仕事に役立てたい、広く子どもの支援にあたっていきたいとモチベーション高く臨まれました。受講生間では実践談義に花が咲き、触発される場面が多くありました。





◇1 月 21 日（土）1 日目　オリエンテーション、講義1～3◇

こどもの可能性を認めていく目をもって、問い続けていく “こども支援士” であってほしいと開講の言葉があり、輪になっての自己紹介から 5 日間の講座がスタートしました。



受講生の方々の意気込み／モチベーション

◇ベビーマッサージが専門。こどもの笑顔はママの笑顔から。怒っていても笑顔に見えるメイクを手がけている
○民間学童で働く。保育士資格はないので、こども支援士取得を考えた。アフタースクールの新設で責任あるポジションを任され、まず勉強と受講。子どもの個性を見極めながら、保護者対応もしつつ日々、模索中
◇特別支援学級のボランティア。教員免許の必要性を感じ、子どもの大学入学を機に、通信教育で教員免許取得に挑戦。子育てのふり返りをしたい。我が子しかみてなかった。多様な価値観があって教育があると思う
○美術の学校教員から、今は地方の教育支援に。絵を通してものをみるようになると、心のひっかかりが大きくなってきた。美術に失敗はない、それを伝えたいが、日本の今の教育では難しいと感じる
◇教育委員会管轄の生涯学習部門でコーディネーター職に長く在る。子ども主体の環境をつくるのが難しい。子どもの力を発揮できる環境をつくり、子ども主体のまちづくりをやっていきたい
○朝鮮学校の放課後居場所事業、子育て支援ネットワーク活動をしている。こどもパートナー、こどもサポーター、こども支援士と学びを深めている
◇訪問看護師として赴く先で、子ども時代のお話をよく。こども支援士として学んでおこうと受講。将来的には、相談できる癒しの場をつくりたい
○学童支援クラブで働いている。地域でこどもの安全を確保する活動をしている。こども食堂にも興味がある
◇企業人として学習支援ボランティアに携わっている。座学で学び直したい
○フルート講師として、ストレスが堪るという子どもの話を聴く。レッスンより、小学生・中学生のストレス話の傾聴がここ 15 年くらい増えている。レッスンの 2 ／ 3 はその話。子どもの心に寄り添った指導がしていきたい
◇障害者手帳をもつ 40 人が利用する学童デイサービスで、アート教室を開いている。造形活動に取組もうとしない子どもが多く、工夫を重ねている。受講生の皆さんとつながりをもち、講義をしっかり聴きたい

① 講義 1　子どもにとってのよい指導者とは
東京学芸大学教授　建築 - 空間デザイン　鉄矢　悦朗

講義：子どもにとってのよい指導者と考えると、指導者も多様でよい、INTERACTION→INTER+ACTION　インターアクション：双方向性を重視してほしい。子どもとその子の対象の関係をアクティブにする存在になってほしいと説かれました。

②講義 2 「しょうがい」を抱えるということ
東京成徳大学教授　社会福祉学　中山　哲志

しょうがいという言葉の捉えられ方が解説され、障害がある方々に関わる機会が多くなるなか、学ぶ機会は貴重と講義が始まります。実践の場で支援の機会も増す障害児教育について、個別の指導計画 / 教育支援計画の解説、発達障害の支援に用いられる「応用行動分析 ABA」の紹介、理解しやすい言葉かけ等、障害をもつ児童・生徒とのコミュニケーション促進のスキルの紹介がなされ、熱心にペンを走らせる姿が多くありました。



デザイン：塚本 万里

③講義３　多国籍化する子どもへの対応

千葉大学教授　国際理解教育学　土田　雄一

アフリカでの教員経験、多国籍児が1 /4，9 国籍に及ぶ公立小学校長のご経験からの説得力ある講義で、国際化もオールドカマー：韓国・フィリピンの方等と、ニューカマー：ブラジル、イスラム圏の方等に分けて考えるべき。多文化の子どもと共に学ぶと、相互理解力、寛容性が育つと、意義を強調されました。多国籍化する子ども／保護者への対応としてインターネット情報の紹介、学校教育を補うかかわりづくりのできるアフタースクールへの期待が述べられ、最後に、防災弱者である外国籍の方々への防災情報の周知の大切さも説かれました。

◇1 月 22 日（日）2 日目　講義 4 ～ 6◇

④講義４　アフタースクールの理念と課題

東京学芸大学准教授　教育心理学　鈴木　聡

子どもを取巻く環境の変化をデータで繙き、希薄な他者関係であり、依存関係にある今の子どもには、“ななめの関係” が成長に効果的な関係性とされます。支援者は、子どもの成長モデルであり続け、横に並んで「共視」ができる（北山修『共視論』より）立ち位置でありたい、“三間”（時間・空間・仲間）と共視の姿勢の支援者がいるのが理想のアフタースクール。共に育てる感覚で臨んでほしいと総括されました。

⑤講義５　子どもにとっての「遊び」 の意味を深める

建築家　環境デザイン研究所会長　仙田　満

遊びの体験は子どものその後の人生に影響を与える、と大型遊具や保育園・公園を設計・デザインされた事例から講義がスタート。遊び 空間の 6 原空間、遊び環境の 4 要素と基本理念が紹介され、遊びで獲得できる5つの能力；身体性、社会性、感性、創造性、挑戦性があり、それら能力の中心に “意欲” が位置するとして、幼少期の遊びの重要性が強調されます。昨今の遊び環境の悪化の要因；IT 化、ライド化、自然体験喪失、大人の不寛容等が挙げられ、支援者である受講生に行動と空間の見直しを提示されました。

⑥講義６　小学英語のあり方を考える

白梅短期大学教授　比較英語学　瀧口　優

いよいよ本格化し、3 年生から英語活動、5 年生から教科としての英語科が始まる小学英語について受講生の高い関心が寄せられました。英語に限定せず外国語教育であると捉え、教員養成を進める、国語教育との連携；母語である日本語の国語力あっての外国語と考える、少人数学級での指導という教育条件の整備と、課題が挙げられました。外国語教育は平和教育であり、外国語を学ぶことで日本語も豊かになる、教師の英語力と教育力のバランスが重視されるべきだと結ばれました。

◇1 月 28 日（土）3 日目　演習 1・2◇

⑦演習1　児童養護施設で暮らす子どもたちにどう接するのか

至誠学園立川・顧問、法政大学名誉教授 社会福祉学 高橋 利一

児童養護施設で長年、指導・運営に携わってこられたお立場から、この子らを受けとめて育むためにをテーマに進行しました。
児童養護施設に養育機能を根づかせるにはと講義が始まり、継続的なライフサイクル支援のため、子どものあるがままを 受けとめ、潜在可能性を見出そうと示唆がありました。日本の大課題である、子どもの貧困にもふれられ、苦しい時、声をあげられることの大切さが説かれました。

⑧演習２　日本の母親・再考

東京成徳大学名誉教授　教育社会学　深谷　昌志

子ども研究の第一人者、こども支援士講座の企画者である深谷先生からは、日本の母親の歴史、父親の問題、子育ての話とトピックが立てられ最新著をもとに母親・父親役割の変遷、子育ておける子どものウェルビーイングと母親のウェルビーイングの矛盾等、現代の子育てを取り巻く課題や提案が示されました。「ひっぱり型」の父親と、「なだめ型」の母親という概念から性差がなくなってきているが、偏るといずれもよくない。両方のバランスが肝要なのは、家族のみならず組織でも企業でも同じであるという示唆には大きく頷く姿がみられました。

◇1 月 29 日（日）4 日目　演習 3・4◇

⑨演習３　発達障害についての理解を深める

筑波大学教授　障害児学　熊谷　恵子

国連で批准された障害者権利条約の合理的配慮の解釈に講義が始まり、基礎的環境整備の上になされる配慮であると解説。受講生も日々、接する機会の多い発達障害の基礎的理解とその指導・支援・配慮について詳らかにされ、学習スタイルを把握する、得意さをうまく使う、連携の重要性等、ポイントの提示がありました。男児の仮想事例を基に「支援会議」のロールプレイングに挑戦。情報共有しながら動く今の学校を体感し、外部からどうサポートするかを考える契機となりました。

⑩演習４　虐待を受けた子どもの心の闇

東京学芸大学名誉教授　児童臨床心理学　深谷　和子

文学上の古典に登場する虐待例の解説に始まり、虐待の増加は、育てにくいとされる発達に偏りのある子の存在とともに、親性の乏しい母親にも拠るとの認識が示されました。養育の難しい里子を抱える里親調査を分析した新著から、療育の必要性、子どもの中のレジリエンスへの期待が述べられ、こども支援士となる方々にはメンターとなってほしいと結ばれました。

◇2 月 5 日（日）5 日目 課題研究 放課後の子どもをめぐって◇

最終日は、各 7 分で 14 名が自らの実践に基づく、課題研究のプレゼンテーション。深谷昌志先生、新渡戸文化短期大学専任講師：星順子先生、東京学芸大学准教授：柴田彩千子先生から、講評と口頭試問さながらの質問がありました。



☆発表テーマ

「子どもの放課後の現状にふれながら、放課後をどう再建するかを考える」

受講生には標題のレポートが課され、自らの実践テーマに立脚し、課題抽出と、再建への提案レポートを、深谷先生、星先生、柴田先生に提出しました。発表の後、5 分程度の口頭試問、質疑応答がなされ、課題意識を深めてフロアとともに受講生の各自がめざす放課後像を共有しました。

受講生の方々のめざす放課後像

◇ほっとできる心の居場所　○質の高いデイサービスの提供
◇気になる子の個性が理解される三間の再構築　○サイレントベビー問題に注力し、親子で遊べる場づくり　◇こども食堂も射程に温かい放課後をつくる　○マイノリティが認められる学校環境づくりを地域から　◇音楽で子どもを受容、やればできるを育てる
○失敗していいと保障できる放課後づくり　◇中高生の放課後支援と人員確保　○被災地で美術を通した放課後居場所
◇子ども支援＝親支援の放課後　○民間企業運営のアフタースクールを子ども目線に　◇子どもが安心して過ごせる居場所を
○障害をもつ子のデイサービスで本人が育つ力を育む

先生方からのコメントから

・日本社会の多文化共生に投げかけがなされている。指導員の外国人学校への理解について伺え興味深かった
・多国籍児対応は、放課後の今後の大きな課題であり、文化的背景も配慮していかれたい
・子どもは感情表現を言葉だけではできない。寄り添うことが他者理解に繋がる。他者理解ができれば適切なタイミングでの声かけもできる
・育児情報はママ友からとなっており、地域で、ななめの関係にある方からの支援は大切、それがこども支援士である
・実践に基づく発表。子どもを育てるところから地域をかえる女性の活動もある。子育ては地域づくりにもなる

深谷先生 総括　アフタースクールは発達障害の子ども、多国籍の子どもに対応していくべきである。放課後の子どもたちの自主性が育っていないので、地域の放課後プランをつくっていってほしい。地域の総合力のなかでアフタースクールが育っていくと、日本の子どもの将来が築ける。仲間のなかで育っていくのがアフタースクール、ここを構築していってほしい

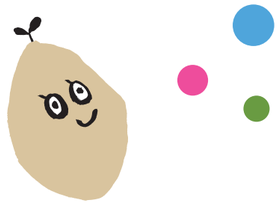
修了式　こども支援士は 140 名ほどの人数に



深谷先生から１人１人に修了証が授与されました



交流会では、意見交換・情報交換が盛んになされ、今後毎月1回の情報交換会をもとうというお話がまとまっていました。受講後のこども支援コミュニティの形成が瞬時にできていく骨太さが、こども支援士認証講座の醍醐味であるといえます。



こども支援士講座修了の皆さん　充実の笑顔！

